

巻頭記事

「コロナ禍において無形文化遺産を守り、伝えるには」

調査研究

「国際研修におけるIT技術導入のための実証実験」の開催

研究成果公開

報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究
ーワット・ラーチャプラディットの漆扉』の刊行

教育普及

「文化財修復技術者のための科学知識基礎研修」の開催報告

インフォメーション

伝統楽器の製作技術の調査
(於：株式会社東京和楽器、
令和2(2020)年7月)

Investigation on traditional musical
instrument manufacturing techniques
(at Tokyo Wagakki Co. Ltd., in July,
2020)

目次 Contents

巻頭記事

- 無 コロナ禍において無形文化遺産を守り、伝えるには
……………（無形文化遺産部・石村智） p1

調査研究

- 情 丸亀・妙法寺における与謝蕪村作品の調査・撮影
……………（文化財情報資料部・安永拓世） p4
- 無 古典芸能に関わる文化財保存技術の調査—能装束製作—
……………（無形文化遺産部・佐野真規） p6
- 保 キトラ古墳壁画の泥に覆われた部分の調査
……………（保存科学研究センター・犬塚将英、早川典子、紀芝蓮） p8
- 保 国宝・特別史跡白杵磨崖仏の保存修復に向けた基礎研究
……………（保存科学研究センター・倉島玲央） p10
- 国 伊藤延男氏関係資料の受贈
……………（文化遺産国際協力センター・金井健） p12
- 国 「国際研修におけるIT技術導入のための実証実験」の開催
……………（文化遺産国際協力センター・五木田まきは） p14
- 国 スタッコ装飾及び塑像に関する研究調査（その2）
……………（文化遺産国際協力センター・前川佳文） p16
- 国 文化遺産国際協力コンソーシアムによる「アフガニスタンの文化遺産保護に関する緊急声明」の発表
……………（文化遺産国際協力センター・藤井郁乃） p18
- 情 創造美育協会の活動とアーカイブ—第5回文化財情報資料部研究会の開催
……………（文化財情報資料部・塩谷純） p20
- 情 世界遺産条約の履行に関する最近の国内外の動向—第6回文化財情報資料部研究会の開催
……………（文化財情報資料部・二神葉子） p22

研究成果公開

- 情 報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究—ワット・ラーチャプラディットの漆扉』の刊行
……………（文化財情報資料部・二神葉子） p24
- 情 和泉市久保惣記念美術館での講演とリートベルク美術館のシンポジウムでの発表
……………（文化財情報資料部・江村知子） p26
- 情 Art news articlesの公開について
……………（文化財情報資料部・小山田智寛） p28
- 国 第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産にまつわる情報の保存と継承—開かれたデータベースに向けて—」の開催
……………（文化遺産国際協力センター・藤井郁乃） p30

教育普及

- 情 文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」の開催
……………（文化財情報資料部・二神葉子） p32
- 情 第55回オープンレクチャーの開催
……………（文化財情報資料部・小野真由美） p34
- 保 「文化財修復技術者のための科学知識基礎研修」の開催
……………（保存科学研究センター・早川典子） p36

インフォメーション

情：文化財情報資料部 無：無形文化遺産部
保：保存科学研究センター 国：文化遺産国際協力センター

Feature

- Protection and Inheritance of Intangible Cultural Heritage during the COVID-19 Pandemic**
(ISHIMURA Tomo, Department of Intangible Cultural Heritage) ... p2

Research

- Investigation and Photographing of the Paintings by Yosa Buson in Myōhōji Temple of Marugame City**
(YASUNAGA Takuyo, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p5
- Research on Preservation Techniques for Cultural Properties That Are Related to Traditional Performing Arts—Manufacturing Noh Costumes**
(SANO Masaki, Department of Intangible Cultural Heritage) ... p7
- Investigations of Kitora Tumulus Wall Paintings Covered with Mud**
(INUZUKA Masahide, HAYAKAWA Noriko, CHI Chih lien, Center for Conservation Science) p9
- Basic Research for Preservation and Restoration of Usuki Stone Buddhas, a National Treasure**
(KURASHIMA Reo, Center for Conservation Science) p11
- Donation of Materials related to Dr. Ito Nobuo**
(KANAI Ken, Japan Center for International Cooperation in Conservation) p13
- A trial for the introduction of digital technology in international courses**
(GOKITA Makiha, Japan Center for International Cooperation in Conservation) p15
- A Research Survey into Stucco Decorations**
(MAEKAWA Yoshifumi, Japan Center for International Cooperation in Conservation) p17
- The Urgent Statement on the Protection of Cultural Heritage in Afghanistan by JCIC-Heritage**
(FUJII Ikuno, Japan Center for International Cooperation in Conservation) p19
- Activities and Archives of the Sōzō Biiku Kyōkai: the 5th Seminar Held by the Department of Art Research, Archives and Information Systems**
(SHIOYA Jun, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p21
- Recent International and Domestic Trends on the Implementation of the World Heritage Convention: the 6th Seminar held by the Department of Art Research, Archives and Information Systems**
(FUTAGAMI Yoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p23
- Publication of Research Results**
- Issuance of the Report “Study of the Japan-made Lacquerwork found in Thailand – Lacquer Door Panels of Wat Rajpradit”**
(FUTAGAMI Yoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p25
- Lecture at Kubosō Memorial Museum of Arts, Izumi and Keynote Speech at the International Symposium in Rietberg Museum, Switzerland**
(EMURA Tomoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p27
- Publication of Art News Articles**
(OYAMADA Tomohiro, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p29
- The 29th JCIC-Heritage Seminar: “Retention and Succession of the Information associated with Cultural Heritage~For Whom and What Purpose~**
(FUJII Ikuno, Japan Center for International Cooperation in Conservation) p31
- Educational**
- Seminar on the Documentation of Cultural Properties – “Documentation of Cultural Properties for Protection and the Principle of Image Compression”**
(FUTAGAMI Yoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p33
- The 55th Public Lecture**
(ONO Mayumi, Department of Art Research, Archives and Information Systems) p35
- A Workshop on Basic Science for Conservators**
(HAYAKAWA Noriko, Center for Conservation Science)..... p37

Information

巻頭記事

無 コロナ禍において無形文化遺産を守り、伝えるには

令和2（2020）年初頭より全世界に広がった新型コロナウイルス感染症は、文化遺産の保護においても大きな影響を与えています。とりわけ無形文化遺産にとってその影響は顕著でした。なぜならそれは生きている人間によって担われている文化遺産であり、その人間そのものを狙い撃ちにしたのがウイルスであったからです。

無形文化遺産としての古典芸能を例に見てみましょう。古典芸能はその技を習得した実演家という人間によって担われていますが、まずその人間がウイルスによって健康を脅かされています。また古典芸能を披露する場として劇場での公演がありますが、人が集まり感染を広げる可能性があるため、それを行うのも困難になったり制限を設けたりせざるを得なくなりました。多くの実演家は公演によって収入を得ているため、経済的にも大きな影響を受けることとなりました。さらには古典芸能の技の多くは師匠が弟子に対面で稽古をつけることによって伝えられてきましたが、コロナ禍ではこうした機会が奪われることも多く、その伝承にも大きな影を落としています。

コロナ禍で影響を受けるのは実演家だけではありません。劇場での公演が中止や延期になることにより、それに関わる劇場関係者や広告関係者など、様々な方面にその影響がおよんでいます。さらには、その古典芸能を演じるにあたって必要な道具、例えば楽器や衣装といったものを製作したり修理したりする関係者にとっても、需要が大きく落ち込むという深刻な影響を与えています。

そうした状況の中にあった令和2（2020）年の春、長年にわたって三味線を製作してきた老舗メーカーが経営の危機にあり廃業を決めたというニュースが流れ、各方面に大きな衝撃を与えました。三味線は多くの古典芸能で用いられている、なくてはならない楽器であり、もしそのメーカーがなくなってしまうのなら三味線そのものを手に入れることが難しくなる可能性があったからです。

実はコロナ禍の状況になる以前から、邦楽器もしくは和楽器と呼ばれる日本の伝統楽器は、存続していくのに困難な状況にあることが指摘されていました。その大きな理由はやはり、年々その演奏家や愛好家が減ってきているということでした。それを受けて東京文化財研究所の無形文化遺産部では平成29（2017）年より継続的に伝統楽器の調査を実施し、三味線や琵琶などを製作する職人の技術の記録作成を行ってきました。こうした困難な状況が、コロナ禍によって一気に加速したと言えるでしょう。

幸いなことに、この老舗三味線メーカーを支援しようという輪が各方面に広がり、あるロックバンドがチャリティーを呼びかけるなどしたために、会社は廃業の方針を撤回し、存続することとなりました。さらに令和3（2021）年9月には国は選定保存技術として「三味線棹・胴製作」を選定し、国として三味線の製造技術を支援していくこととなりました。これによって当面の危機を脱することができましたが、伝統楽器を取り巻く状況は依然として厳しいままであり、今後もその動向に注目していく必要があります。

このようにコロナ禍において無形文化遺産が大きな影響を受ける可能性があることを私たちは早い段階から認識していました。しかし一方で、これまで私たちが行ってきた無形文化遺産の調査研究の多くは、その担い手である人たちに文字通り「密着」して実施してきたものでした。そうした調査研究の手法そのものがコロナ禍によって大きく制限されたことは、私たちにとっても痛手でした。

しかしこうした状況だからこそ私たちができることを考えた結果、コロナ禍における無形文化遺産の情報を収集し発信することに力を注ぐことにしました。令和2（2020）年5月1日には当研究所無形文化遺産部のウェブサイト上に「新型コロナウイルスと無形文化遺産」(<https://www.tobunken.go.jp/ich/vscovid19>)のページを立ち上げ、そこに国や地方公共団体、民間団体などからの支援（給付金、

助成金など）に関する情報を提供することにしました。また同時に当研究所Facebook内にグループ「新型コロナウイルスと無形文化遺産」を立ち上げ、ここでも支援情報の提供を行うとともに、コロナ禍における無形文化遺産の状況をレポートしたニュース記事や、ユネスコをはじめとする国際的な動向に関する情報についても紹介しています。また令和2（2020）年6月からはウェブサイト上に「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」のページを開設し、関連事業の延期・中止情報及び再開・開催関連情報を収集したものについてグラフの形で数量的データを示しています。さらに「新型コロナウイルスと無形文化遺産フォーラム」と題した研究会を企画し、令和2（2020）年9月に「フォーラム1『伝統芸能と新型コロナウイルス』」、12月に「フォーラム2『新型コロナ禍における無形民俗文化財』」、令和3（2021）年12月に「フォーラム3『伝統芸能と新型コロナウイルス—Good Practiceとは何か—』」を開催しました。

私たちのこうした取り組みが、コロナ禍において無形文化遺産を守り、伝えていくことに貢献できればと願っています。

私たちは依然としてコロナ禍の状況にいますが、いつの日かコロナ禍も終息することでしょう。しかしコロナ禍が終息したら、無形文化遺産が直面している危機も解決すると考えるのは明らかに楽観的なものでしょう。なぜならそうした課題は、むしろコロナ禍以前から内在していた課題であり、コロナ禍によってそれが加速され、顕在化したものだと考えられるからです。例えば日本の伝統楽器が厳しい状況にあったのはコロナ禍以前からであったことは、上で述べた通りです。

むしろコロナ禍が終息し、様々な支援が打ち切られた時こそ、無形文化遺産が生き残っていく正念場になることが予想されます。コロナ禍を越えて、無形文化遺産を守り、伝えていくために何をすべきかを考え続ける必要があるのです。私たちもこの困難な課題に真剣に取り組んでいきたいと考えています。

（無形文化遺産部・石村智）

Protection and Inheritance of Intangible Cultural Heritage during the COVID-19 Pandemic

COVID-19 has spread across the world since the beginning of 2020 and has been significantly impacting the protection of cultural heritage. In particular, the impact on intangible cultural heritage has been significant because they are cultural heritage of living human beings, who are directly affected by COVID-19.

Consider traditional performing arts as an example. Traditional performing arts are staged by performers, who are the human beings mastering these performance techniques. The health of these performers has been threatened by the virus. In addition, these performances, which are usually performed in theaters, either became difficult to continue or were performed only for a limited audience to avoid the risk of infection. Most performers earn their living through these performances, and thus suffered financially. Furthermore, many techniques used in traditional performing arts have been inherited through in-person training from masters to their disciples; however, these training opportunities have been dramatically reduced during the COVID-19 pandemic. As a result, the inheritance of traditional performing arts was negatively affected.

Performers were not the only ones affected by the pandemic. Cancellations and postponements of performances in theaters led to reduced work opportunities for many related parties, including theater staff and advertisement personnel. Furthermore, reduced demands have led to significantly negative impacts on the workers who create and repair the required tools, including musical instruments and costumes, for these traditional performing arts.

Many people across various industries were shocked to hear the news that a long-established manufacturer of Shamisen decided to close their business due to a management crisis. They were worried because the closure of this business meant that the Shamisen, a necessary musical instrument for many traditional performing arts, may no longer be available for purchase.

Long before the COVID-19 pandemic, the reduced survivability of some Japanese traditional musical instruments called “Hogakki” or “Wagakki” were noted. The major reason for this is the declining number of performers and fans each year. Based on this background, since 2017, the Department of Intangible Cultural Heritage in Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) has been continuously investigating musical instruments, such as Shamisen and Biwa, and meticulously compiling records of the techniques used by artisans to make them. In these circumstances, the COVID-19 pandemic has exacerbated this situation.

Fortunately, support activities for the Shamisen manufacturer spread beyond the industry. A rock band promoted charitable efforts aimed to help them. With their support, the manufacturer retracted their decision to shut down their business. In addition, the Japanese government selected “Shamisen’s ‘Sao’ (neck) and ‘Doh’ (body) manufacturing” as one of the techniques for preservation and decided to support the manufacturing techniques of Shamisen. Although they managed to survive the short-term crisis, the conditions surrounding the manufacturing of traditional musical instruments remain difficult to handle, and their movements must be closely monitored.

Although we recognized during the early stages that intangible cultural heritage can be impacted by the COVID-19 pandemic, it was unexpected that the pandemic would also significantly limit our research methodologies because we conducted majority of our investigations and research through face-to-face activities with those in charge.

Thus, while evaluating our options on how to aid in the given situation, we decided to focus on collecting and disseminating information on intangible cultural properties. We launched the webpage “Intangible Cultural Heritage and COVID-19” (<https://www.tobunken.go.jp/ich/vscovid19>) on the website of the Department of Intangible Cultural Heritage on May 1st, 2020. Here, we post support-related information, including details about benefits and grants provided by the government, local public organizations, and private organizations. We also launched a Facebook group called “Intangible Cultural Heritage and COVID-19” on the TOBUNKEN Facebook page. Here, we post support information, news articles reporting intangible cultural heritage status during the COVID-19 pandemic, and information about international movements, including those carried out by UNESCO. We also launched a new webpage called “Impact of COVID-19 on Traditional Performing Arts” in June 2020 to share numeric data in form of graphs based on the collected information about related businesses/events that were “postponed and cancelled” and “resumed and held.” In addition, we planned a series of forums titled “Intangible Cultural Heritage and COVID-19.” “Forum 1: Traditional Performing Arts amid COVID-19 Pandemic,” “Forum 2: Intangible Folk Cultural Properties amid the COVID-19 Pandemic,” and “Forum 3: Traditional Performing Arts amid COVID-19 Pandemic: Seeking Good Practices for Safeguarding” were conducted in September 2020, December 2020, and December 2021, respectively.

We sincerely hope that we can contribute toward protecting and inheriting intangible cultural heritage through these activities.

Although the COVID-19 pandemic has persisted, it will inevitably end in the future. It may be too optimistic to believe that the ongoing crisis related to intangible cultural heritage, can be resolved once the COVID-19 pandemic is over, because these issues have implicitly existed even before the pandemic and the pandemic merely exacerbated these issues. For example, manufacturers of traditional musical instruments have been experiencing difficulties even before the pandemic, as mentioned above.

It may become increasingly challenging to ensure that this intangible cultural heritage survive when the COVID-19 pandemic is over and the various support efforts cease. We must continue exploring our options for protecting and inheriting intangible cultural heritage beyond the current pandemic. We, the Department of Intangible Cultural Heritage, are sincerely dedicated toward tackling these challenging issues.

(ISHIMURA Tomo, Department of Intangible Cultural Heritage)



伝統楽器の製作技術の調査

(於：株式会社東京和楽器、令和2（2020）年7月)

Investigation on traditional musical instrument manufacturing techniques (at Tokyo Wagakki Co. Ltd., in July, 2020)

情 丸亀・妙法寺における与謝蕪村作品の調査・撮影



この記事はインターネットでも読むことができます。

香川県丸亀市にある妙法寺は、江戸時代の画家で俳諧師でもあった与謝蕪村（1716-83）が明和5（1768）年に訪れて、多くの絵画作品を残したことで知られる寺院です。その妙法寺で蕪村が描いた「寒山拾得図襖」（重要文化財）は、現状では寒山の顔の一部が損傷し、失われています。しかし、近年、東京文化財研究所が昭和34（1959）年に妙法寺で撮影したモノクロフィルムに、損傷前の状態が写されていたことがわかり、当初の図様が判明したのです。

そこで、当研究所では、この古いモノクロフィルムと、新たに撮影する画像を用いて、損傷した襖絵をデジタル画像で復原するという調査研究を、妙法寺と共同で行うこととなりました。

令和3（2021）年8月24日から28日にかけて、新型コロナウイルスへの十分な感染対策を講じたうえで、この共同研究の調査・撮影のため、城野誠治・江村知子・安永拓世・米沢玲（以上、文化財情報資料部）の4名で妙法寺を訪れました。調査の対象となったのは、「寒山拾得図襖」「蘇鉄図屏風」「山水図屏風」「竹図」「寿老人図」（いずれも蕪村筆）です。全作品ともカラー画像を撮影し、「寒山拾得図襖」「蘇鉄図屏風」「山水図屏風」については赤外線画像も撮影しました。また、「寒山拾得図襖」の復原画像は、最終的に襖に仕立てて本堂に奉安するため、建具制作や文化財修理の専門業者による採寸も行われました。

モノクロフィルムでしか図様がわからない部分を、いかにカラー変換するかなど課題もありますが、この復原を通して、当研究所が蓄積してきた画像資料の新たな活用法を探りたいと思います。

（文化財情報資料部・安永拓世）



損傷のある寒山図襖

Damaged “Hanshan” sliding door



調査の様子

Investigation

Investigation and Photographing of the Paintings by Yosa Buson in Myōhōji Temple of Marugame City



This article can also be read on the internet.

Myōhōji Temple, located in Marugame city, Kagawa prefecture, is known for the fact that Yosa Buson (1716–1783), a painter and haiku poet of the Edo era, visited it in 1768 and left many of his paintings there. His painting “Hanshan and Shide,” an Important Cultural Property, is damaged and Hanshan’s face is partially lost. Fortunately, the previous image including Hanshan’s face undamaged was retrieved from the monochrome films that were shot in the Myōhōji Temple by the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) in 1959. It was recently found that the films showed the painting in its undamaged form.

TOBUNKEN conducted an investigation, photography project, and research study to reproduce this damaged painting placed on sliding doors (fusuma-e) as digital images based on the existing monochrome films and new images produced through this project.

Four staff from the Department of Art Research, Archives, and Information Systems—SHIRONO Seiji, EMURA Tomoko, YASUNAGA Takuyo, and MAIZAWA Rei—visited the Myōhōji Temple from August 24th to 28th, 2021 for this research investigation and photography with sufficient infection control measures against COVID-19. The investigation targets were “Hanshan and Shide,” “Cycad,” “Landscapes,” “Bamboo,” and “Jurō (God of longevity),” all works of Yosa Buson. All paintings were shot in color, while “Hanshan and Shide,” “Cycad,” and “Landscapes” were also shot using infrared (IR) imaging. Furthermore, a woodworker and conservators measured “Hanshan and Shide” sliding doors because the reproduced image of “Hanshan and Shide” will be mounted on sliding doors and placed in the main hall of Myōhōji Temple.

There are still challenges such as finding a way to convert the monochrome image into a color image. We would like to explore new ways to utilize the image materials accumulated by TOBUNKEN through this reproduction experience.

(YASUNAGA Takuyo, Department of Art Research, Archives and Information Systems)



撮影の様子

Photographing

無 古典芸能に関わる文化財保存技術の調査—能装束製作—



この記事はインターネットでも読むことができます。

無形文化遺産部では文化財の保存技術について、調査研究を行っています。文化財保存技術のうち、能楽に関するものとして、「能装束製作」について調査を行いました。能楽は舞台上で上演されますが、上演に際しては能面や能装束等が必要不可欠です。芸能そのものに加え、それを支える技術も無形の文化財の継承に欠かすことができません。

「能装束製作」の技術については、令和2年度に佐々木洋次氏（京都府）が国の選定保存技術の保持者に認定されています。佐々木氏は明治30（1897）年に創業した「佐々木能衣装」の4代目として、京都・西陣の伝統的なジャガードと手織り機を用いてオーダーメイドで能装束を製作しています。能装束には様々な形があり、上演される作品に合わせて選ばれる紋様なども多様です。舞台上で映えるよう、煌びやかな意匠が凝らされているものも多く、製作には能楽師からの繊細な要求に応える高い製織技術が求められます。

今回の調査では、佐々木洋次氏に聞き取り調査を行い、能装束製作の各工程について写真や動画で記録を行いました。その成果の一部を『日本の芸能を支える技』パンフレットの一冊として、令和3年度に刊行することを予定しています。

（無形文化遺産部・佐野真規）



機にける経糸を継ぎ調整する（経継ぎ）

Manually adjusting warps set on the loom

Research on Preservation Techniques for Cultural Properties That Are Related to Traditional Performing Arts—Manufacturing Noh Costumes



This article can also be read on the internet.

The Department of Intangible Cultural Heritage conducts the research on the preservation techniques for cultural properties. We studied the “manufacturing Noh costumes related to Nohgaku*1” technique among various preservation techniques. Nohgaku is performed on stages, where the performers wear masks (Noh masks), costumes (Noh costumes), and other traditional items. Not only the performing arts themselves but also the techniques to support them are mandatory to inherit the intangible cultural heritage.

Mr. SASAKI Yoji (in Kyoto Prefecture) is a government –certified technique holder who has mastered the techniques to manufacture Noh Costumes, moreover these selected preservation techniques are certified by the national government. Mr. SASAKI, who is the fourth president of Sasaki Noh Robes (founded in 1897), manufactures Noh costumes with Nishijin’s*2 traditional handlooms equipped with the Jacquard machine*3 for each order. Noh costumes come in various forms, styles, and patterns and are selected for each drama. Most of them exhibit gorgeous designs, which include shining silk and gold and silver threads, to stand out on the stage. Thus, manufacturing requires highly skilled technique holders to perform weaving techniques to meet the subtle demands of Noh performers.

We interviewed Mr. SASAKI Yoji and recorded each process of manufacturing Noh costumes; the recording included still pictures and videos. We plan to publish a leaflet named “Techniques to support Japanese traditional performing arts” based on the outcomes of this research.



様々な緯糸を使い製織する

Handweaving with various types of woof

*1. Nohgaku is one of the traditional styles of Japanese theater. It includes the lyric drama noh, and the comic theater kyogen (<https://en.wikipedia.org/wiki/N%C5%8Dgaku>)

*2. Nishijin: is a district in Kamigyō-ku, Kyoto, Japan. It is well known for traditional textiles which are often referred to as Nishijin-ori (西陣織) (<https://en.wikipedia.org/wiki/Nishijin>)

*3. Jacquard machines control movements of warps by punch cards to generate complex patterns. They are not powered automatic looms. Sasaki Noh Robes manually develop clothes (using hands) using handlooms equipped with Jacquard machines.

(SANO Masaki, Department of Intangible Cultural Heritage)



裁断し仕立てる

Cutting and tailoring Noh costumes

保 キトラ古墳壁画の泥に覆われた部分の調査



この記事はインターネットでも読むことができます。

主に東京文化財研究所と奈良文化財研究所の研究員で構成される古墳壁画保存対策プロジェクトチームでは、高松塚古墳壁画・キトラ古墳壁画の保存や修復のための調査研究を行っています。高松塚古墳壁画と比べると、キトラ古墳壁画では四神や天文図等に加えて、各側壁に三体ずつ獣頭人身の十二支像が描かれている特徴があります。十二支のうち、子・丑・寅・午・戌・亥の六体の像は存在を確認することができますが、卯・未・酉に該当する箇所は漆喰ごと完全に失われています。そして、残りの辰・巳・申に関しては、該当する箇所の表面が泥に覆われており、これまでのところ、図像の有無は確認できていませんでした。これらの像が描かれている可能性のある3つの壁画片は再構成されておらず、現在は高松塚古墳壁画仮設修理施設にて保管されています。

辰・巳・申の図像の存在を確認するために、プロジェクトチームの材料調査班と修復班の協働により、平成30（2018）年にX線透過撮影による調査を行ったところ、辰に関しては何らかの図像が描かれているようなX線透過画像が得られたものの、多くの課題が残されました。そこで、令和2（2020）年12月に、辰と申が残存している可能性のある壁画片に対して蛍光X線分析を実施したところ、水銀が検出されたことから、図像の存在の可能性を示すことができました。

そして、令和3（2021）年8月11日に、巳が残存している可能性のある壁画片に対して蛍光X線分析を実施しました。この調査には、東京文化財研究所・保存科学研究センターの犬塚将英、早川典子、紀芝蓮の3名が参加しました。巳が描かれていると予め予測しておいた位置を中心に縦横2cmの間隔で蛍光X線分析を行いました。その結果、予測した箇所から水銀が検出されたため、巳についても図像の存在の可能性を示すことができました。

この調査で得られた結果については、令和3（2021）年8月31日に文化庁によって開催された「古墳壁画の保存活用に関する検討会（第29回）」にて報告を行いました。

（保存科学研究センター・犬塚将英、早川典子、紀芝蓮）



蛍光X線分析による調査風景

Investigation using X-ray fluorescent analyses

Investigations of Kitora Tumulus Wall Paintings Covered with Mud



This article can also be read on the internet.

The Protection of Tumuli and Wall Paintings Project Team consisting mainly of researchers from Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) and the Nara National Research Institute for Cultural Properties has been working on research studies to preserve and restore the wall paintings of Takamatsuzuka Tumulus and Kitora Tumulus. Compared with the wall paintings of Takamatsuzuka Tumulus, the wall paintings of Kitora Tumulus are characterized by the twelve signs of the zodiac, depicted as animal heads on human bodies, three of which are featured on each wall along with the Four Divine Creatures and Star Atlas and others.

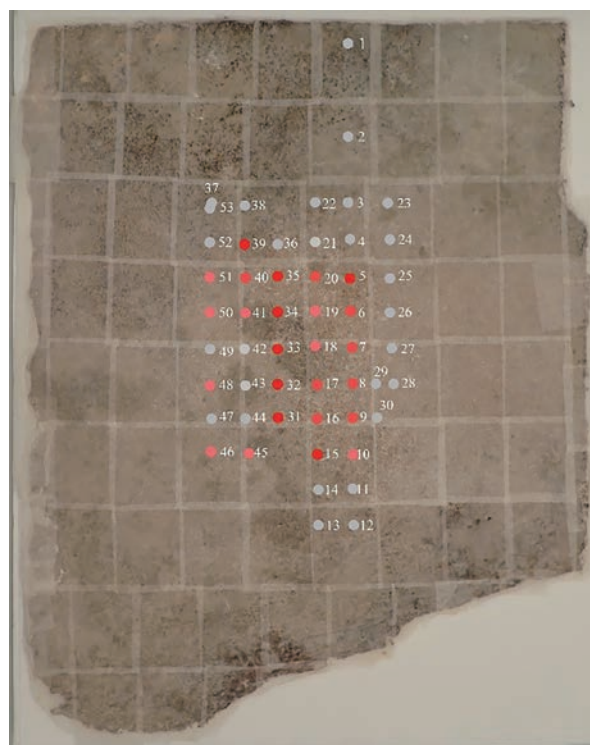
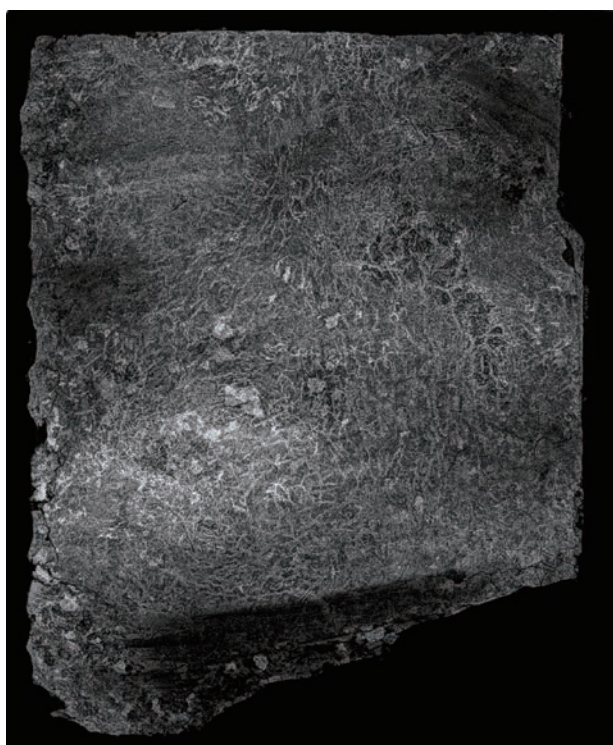
While six figures out of twelve—the Rat, Ox, Tiger, Horse, Dog, and Boar—have been identified, the Rabbit, Sheep, and Rooster are completely lost since the plaster where the paintings should be is missing. The rest, that is, the Dragon, Snake, and Monkey, are not yet identified because the surface of the walls is covered with mud. These three pieces of walls that could contain those paintings are currently not reassembled, but are preserved in the facility for conservation and restoration of Takamatsuzuka Tumulus wall paintings.

The material investigation group and restoration group of this project team worked together on an investigation using X-ray radiography in 2018 and found some radiographic images that seemed to show something drawn in the space where the Dragon was expected to be, but many questions remained. Then, in December 2020, X-ray fluorescent analyses were performed on the parts of the walls where the wall paintings of the Dragon and Monkey could possibly exist. Some mercury was detected, indicating that the figures might be present.

Following this outcome, on August 11th, 2021, further X-ray fluorescent analyses were conducted on the part of the wall where the Snake artwork was suspected to be. Three members of the Center for Conservation Science, TOBUNKEN—INUZUKA Masahide, HAYAKAWA Noriko, and CHI Chih lien—participated in this investigation. X-ray fluorescent analyses were conducted at spots distanced 2 cm apart where the Snake painting was expected to be. The detection of mercury indicated that the painting was indeed present.

These results were reported in the “29th Committee on Preservation and Utilization of Tumulus Wall Paintings” held on August 31st, 2021 by the Agency for Cultural Affairs.

(INUZUKA Masahide, HAYAKAWA Noriko and CHI Chih lien, Center for Conservation Science)



巳が描かれている可能性のある壁画片のX線透過画像（左）と検出された水銀の信号強度の分布（右）

X-ray image of the piece of the wall where the Snake painting could be present (left) and distribution of mercury signal strength (right)

保 国宝・特別史跡臼杵磨崖仏の保存修復に向けた基礎研究



この記事はインターネットでも読むことができます。

国宝・特別史跡臼杵磨崖仏は平安時代後期から鎌倉時代にかけて、熔結凝灰岩を掘りくぼめた龕（がん）内に彫刻された磨崖仏群であり、ホキ石仏第1群、ホキ石仏第2群、山王山石仏、古園石仏の四群から構成されています。

これらの磨崖仏は、龕によって風雨の直接の影響を受けづらい環境ではあるものの、冬期における磨崖仏表面での地下水や雨水の凍結融解を繰り返すことで生じる凍結破碎や、乾燥期の水分の蒸発に伴い析出する塩類による磨崖仏表面の剥離・粒状化によって、一部で磨崖仏の風化が進行していました。風化を防ぐ取り組みとして、覆屋の設置と磨崖仏背面に流れる伏流水の制御のための工事や、風化により生じた剥落片も元の位置に貼り戻す作業が過去に行われ、東京文化財研究所も長らく関わってきた経緯があります。

このような保存修復を経た臼杵磨崖仏ですが、現在、ホキ石仏第2群の阿弥陀如来坐像の膝付近における表面剥落が再び発生していることから、臼杵市と磨崖仏の保存修復を目的とした共同研究を行うこととなりました。具体的には、新設された覆屋内の温湿度変化及び岩壁の含水率を継続して確認する環境調査と、剥落片の強化処置と再接着するための材料の検討を行う予定であり、令和3（2021）年10月18日～19日には計測器と曝露試験用の接着サンプルを設置しました。

今後は、定期的に計測データの確認と接着サンプルの対候性を観察し、臼杵磨崖仏の適切な保存修復に向けて文化庁、大分県、臼杵市と協議していきます。

（保存科学研究センター・倉島玲央）



曝露試験用の接着サンプルの設置

Adherence sample setting for exposure test

Basic Research for Preservation and Restoration of Usuki Stone Buddhas, a National Treasure



This article can also be read on the internet.

Usuki Stone Buddhas, a National Treasure, are a group of “magaibutsu” (Buddha statues directly carved into rock face) sculpted niches that were carved on ignimbrites between the late Heian period and the Kamakura period. They consist of the following four clusters: the Hoki First Cluster, the Hoki Second Cluster, the Sannosan Cluster, and the Furuzono Cluster.

Weathering has partially progressed in these Buddha statues. Although protected by the niches from rainfall and winds, their surfaces have been impacted by repeated frosting and melting of underwater and rainwater during winters, and by flaking and granulating as a result of salt deposition due to evaporation in dry season. Therefore, weathering prevention methods such as building protective shelters, controlling river-bed water running behind the statues, and remounting falling pieces were adopted in the past. Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) has been engaged in these efforts for a long time.

A new joint research with Usuki City has now started to preserve and restore the Stone Buddha Statues. The surfaces around one knee of the seated Amitabha Tathagata Buddha statue in the Hoki Second Cluster have rebegun flaking and falling despite early preservation and restoration efforts. Via environmental research, we plan to monitor the change in temperature and humidity in the newly built protective shelters and review the water content in the rock, in addition to studying materials and implementing methods to strengthen and remount falling pieces. In preparation, we set the measuring equipment and adhesive samples for outdoor exposure testing on October 18th and 19th.

We plan to regularly review the measured data and observe the efficacy of adhesive samples against the weather, while continuing to discuss appropriate actions for the preservation and restoration of the Usuki Stone Buddha Statues with the Agency of Cultural Affairs, Oita Prefecture, and Usuki City.

(KURASHIMA Reo, Center for Conservation Science)



岩壁の水分量を計測するための含水率計の設置

Water content meter setting to measure the amount of water in the rock

国 伊藤延男氏関係資料の受贈



この記事はインターネットでも読むことができます。

去る令和3（2021）年9月13日、昭和53（1978）年4月から同62（1987）年3月までの9年間にわたって東京国立文化財研究所の所長を務めた故伊藤延男氏が所蔵されていた文化財保護行政業務等に関する資料一式が、ご子息である伊藤晶男氏から当研究所に寄贈されました。伊藤延男氏は、戦後の文化財保護の発展を牽引した行政技官・建築史研究者で、特に昭和50（1975）年の文化財保護法の改正で新設された伝統的建造物群保存地区の制度設計では文化庁の建造物課長（1971-1977）として中心的な役割を果たしました。また、我が国の文化財建造物の保存理念と修理方法を積極的に海外に向けて発信し、西欧由来の保存概念であるオーセンティシティが国際的に展開するきっかけとなった平成6（1994）年11月の「オーセンティシティに関する奈良会議」を主導するなど文化財保護の国際分野にも大きな足跡を残しています（詳しくは末尾に掲載した記事をご参照ください）。

今回、受贈した資料は、伊藤氏が業務として携わった文化財保護の行政実務及び国際協力の一次資料を中心に、建築史及び文化財に関する研究活動や民間活動の諸資料、執筆原稿など多岐にわたります。これらは生涯を通じて旺盛であった同氏の活動を通じて蓄積されてきたもので、体系的に収集、整理されたものではないため、現段階では詳細な情報が明らかではないものが多く含まれていることも確かです。しかし、できるだけ早く資料そのものを必要とする研究者等の閲覧に供することが重要との考えから、資料全体を活動内容で大きく分類し、個々の資料の機械的な整理を終えた段階で公開していく予定です。

受贈資料の中から、若かりし日の伊藤氏が文化財保護委員会事務局建造物課の同僚らとともに写った写真を紹介します。左から3人目が伊藤氏で、同氏の風貌や同封されていた他の写真との関係から、同氏が文化財調査官として現場で活躍していた昭和40（1965）年頃の撮影と思われます。年報や報告書に載るようなこまだった写真からはなかなか感じ取ることができない、この写真に写る面々の生き生きとした屈託のない笑顔からは、文化財保護行政もまた高度経済成長の右肩上りの時代の空気とともにあったことが伝わってくるようです。

（文化遺産国際協力センター・金井健）

- ・斎藤英俊：伊藤延男先生のご逝去を悼む，建築史学 66巻, pp.148-159, 2016 :
 “To the Memory of Dr. Nobuo Ito” by SAITO Hidetoshi
 2016 Volume 66 Pages 148-159
 JOURNAL OF THE SOCIETY OF ARCHITECTURAL HISTORIANS OF JAPAN
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsahj/66/0/66_148/_article/-char/ja/
- ・伊藤延男，日本美術年鑑 平成28年版, pp.557-558, 2018 :
 ITO Nobuo 2016 Year Book of Japanese Art, page 557-558, Online in 2018
<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/809181.html>

Donation of Materials related to Dr. Ito Nobuo



This article can also be read on the internet.

On September 13th, a set of materials related to the administrative work for the protection of cultural properties, where Dr. Ito Nobuo served as Director of the Institute for nine years from April 1978 to March 1987, was donated to the Institute by his son, Mr. ITO Akio. Dr. Ito was a technocrat and architectural historian who led the development of cultural property protection in the postwar period. In particular, he played a central role as director of the Buildings Division of the Agency for Cultural Affairs (1971–1977) in the planning of the traditional town/village conservation system, which was newly established as a result of the revision of the Law for the Protection of Cultural Properties in 1975. He has also left a significant mark in the international field of heritage conservation by actively communicating Japan's conservation philosophy and repair methods, and by leading “the Nara Conference on Authenticity” held in November 1994, which led to the international development of authenticity, a concept of conservation originating in Western Europe.

The donated documents are mainly primary materials related to the administration of cultural property protection and international cooperation that Dr. Ito was involved in as part of his work, as well as various materials related to research activities, private activities, and manuscripts related to architectural history and cultural properties. These materials were accumulated during the active life he led, and since they have not been systematically collected and organized, it is certain that among them are many items for which detailed information is not clear at this stage. However, from the viewpoint that it is important to make the materials available to researchers who need them as soon as possible, we plan to make them accessible to the public after classifying all the materials according to activity and sorting each item mechanically.

Among the donated materials, I would like to bring to your attention a photograph of a young Dr. Ito with his colleagues from the Buildings Division of the Committee for the Protection of Cultural Properties. Considering the appearance of Dr. Ito and the other photographs enclosed, my guess is that it was taken around 1965 when he was working hard as an architectural conservation officer at the site. The carefree demeanor and lively smiles of all in this photograph seem to indicate that the cultural properties administration was carried out during an era when Japan's economy was booming. This fact is not easily perceivable in the formal photos from official reports.

(KANAI Ken, Japan Center for International Cooperation in Conservation)



文化財保護委員会時代の伊藤氏（左から3人目、周りは建造物課職員及び修理技術者の各氏とその家族：右端は伊藤氏の前に建造物課長（1966–1971）を務めた日名子元雄氏、その左隣は当研究所の修復技術部長（1988–1990）を務めた伊原恵司氏）

Dr. Ito with his colleagues of the Committee for the Protection of Cultural Properties and their families (Third from left. Right end is Hinako Moto'o who served as Director of the Buildings Division (1966–1971) before Dr. Ito, and Ihara Keishi who served as Director of Restoration Engineering Department (1988–1990) of the Institute on his left.)

国「国際研修におけるIT技術導入のための実証実験」の実施



この記事はインターネットでも読むことができます。

東京文化財研究所では、日本の紙本文化財の保存と修復に関する知識や技術を伝えることを通じて各国における文化財の保護に貢献することを目的として、平成4（1992）年よりICCROM（文化財保存修復研究国際センター）との共催で国際研修「紙の保存と修復」（JPC）を実施してきました。この研修では例年、海外より10名の文化財保存修復専門家を招聘してきましたが、新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大の影響により令和2年度に続いて令和3年度も開催中止を余儀なくされました。このような状況を受け、大半が実技実習で構成されるJPCのような研修について、オンライン開催の可能性を探るとともにその実現に向けての課題を明らかにするため、令和3（2021）年9月8日から15日にかけて、「国際研修におけるIT技術導入のための実証実験」を実施しました。

実験に先立ち9月1日に、紙本文化財の主要な修復材料である「糊」と「紙」の基礎的な知識についての講義を、ライブ配信とオンデマンド配信を併用してオンラインで行いました。実習は、当研究所職員5名を模擬研修生として、対面会場とサテライト会場の2会場で行いました。対面会場に国の選定保存技術「装幀修理技術」保持認定団体の技術者を講師として迎え、サテライト会場とライブ中継しながら紙本文化財を卷子に仕立てるまでの修理作業を実習しました。最終日の意見交換会では、ICT機器を活用する利点が認識された一方、受講生が事前に一定の基礎知識や経験を得ていることの必要性、画面越しでの技術指導の限界、ネットワーク環境や機材に起因するトラブルへの対応の難しさ等、オンラインでの実技実習をめぐる様々な課題点も浮き彫りとなりました。

（文化遺産国際協力センター・五木田まきは）



オンライン実習風景

Online practical session

A trial for the introduction of digital technology in international courses



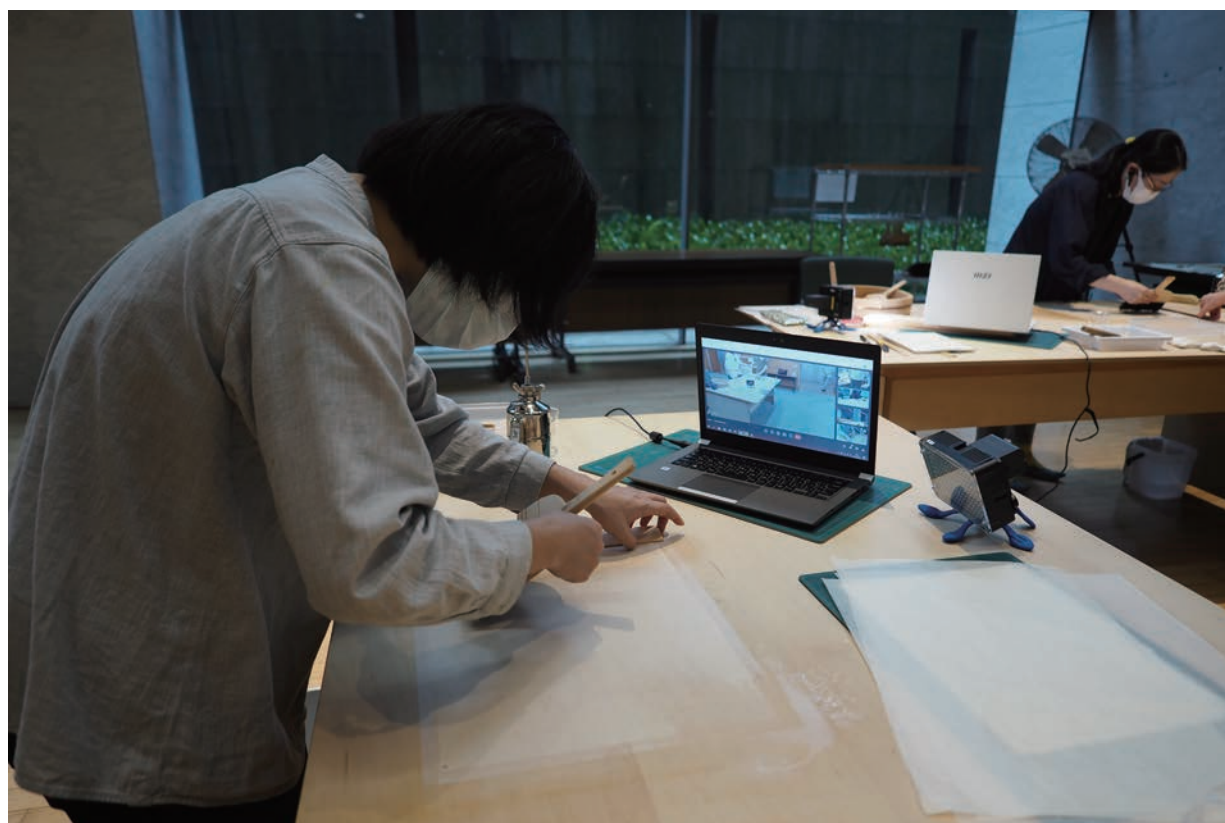
This article can also be read on the internet.

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) and the International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property (ICCROM) have been jointly organizing “the International Course on Conservation of Japanese Paper” (JPC) since 1992.

The course aims to contribute to the protection of cultural property outside Japan by disseminating the knowledge and techniques of conservation and restoration of paper cultural property in Japan to participants from around the world. Every year, we have invited 10 specialists in conservation from all over the world; however, due to the COVID-19 pandemic, we could not hold the course in 2020 and 2021. Under these circumstances, we conducted a trial experiment for the introduction of digital technology in international courses from September 8th to 15th. The trial aimed to examine the possibility of holding online courses, which are mainly composed of practical sessions such as the JPC, and to clarify problems toward the realization of the online course itself.

Before the trial, lectures were held on basic knowledge of adhesives and paper, which are major conservation materials for cultural properties on paper. The lectures were livestreamed and archived. As for the practical sessions, five simulated participants from the staff members of TOBUNKEN were divided into two groups; the one received in-person teaching and the other was given online instructions at a satellite venue. The practical sessions were led by conservators from a certified group holding the Selected Conservation Techniques on “Restoration techniques for mounts.” The participants experienced the process of restoration of a handscroll from cleaning to mounting. On the last day, the lecturers and participants discussed the effectiveness of online courses. Although the merits of the use of ICT devices were recognized, issues of doing practical sessions online, such as the necessity of having basic knowledge and experience of paper conservation in advance, the limitations of technical training through a computer, and the difficulties of troubleshooting the network environment and communication devices were highlighted.

(GOKITA Makiha , Japan Center for International Cooperation in Conservation)



サテライト会場の様子

The satellite venue

国 スタッコ装飾及び塑像に関する研究調査（その2）



この記事はインターネットでも読むことができます。

文化遺産国際協力センターでは、令和3年度より、運営費交付金事業「文化遺産の保存修復技術に係る国際的研究」の一環として、スタッコ装飾に関する研究調査を行なっています。令和3（2021）年9月11日には、スタッコ装飾の保存に携わる欧州の専門家に参加いただき、第2回目となる意見交換会を開催しました。

意見交換では、粘度調整やひび割れ抑制のための工夫として、日本で漆喰壁の需要が高まった江戸時代から調合されるようになった海藻のりや紙スサの利用に注目が集まりました。スタッコ装飾の長い歴史をもつ欧州においても同様に、これまで様々な創意工夫が行われてきましたが、日本とは異なる材料が使われています。このことから、特定の時代において各国や地域で利用されていた添加剤を本研究調査における比較対照項目に追加し、データベース化していくことが決まりました。

またこれに関連して、様々な添加剤に含まれる成分が、化学的にどのように作用することで効果をもたらすのかという点についても研究を進めていく予定です。制作に用いられた素材やその性質、さらには制作時の技法は、その後の経年劣化や破損の様相にも大いに影響してきます。適切な保存修復方法を導き出すためにも、こうした研究は大変重要だといえます。

本研究調査はスタッコ装飾に焦点を当てる形でスタートしましたが、その歴史を紐解いていくと塑像とも密接に関係していることがみえてきました。今後は、素材や制作技法に共通性が多くみられるこれらの文化財も視野に入れながら、その適切な保存と継承の方法について考えていきたいと思います。

（文化遺産国際協力センター・前川佳文）



17世紀のスタッコ装飾例（サンタ・マリア・アッスンタ大聖堂）

Stucco Decorations in the 17th century (Cattedrale di Santa Maria Assunta)

A Research Survey into Stucco Decorations and Clay Statues (Part 2)



This article can also be read on the internet.

The Japan Center for International Cooperation in Conservation has been conducting research and surveys investigating stucco decorations in fiscal year 2021 as part of the “International Research on Technology for the Conservation and Restoration of Cultural Heritage” program, which offers grants for research expenses. On September 11th, 2021, we held a second discussion with experts from Europe involved in the conservation of stucco decorations.

In this discussion, the use of glue made of seaweed and “Kami Susa” (binder made of “Washi” – Japanese paper – and used as part of plaster) attracted participants’ interest. These materials began to be made in order to control the plaster thickness and prevent plaster from cracking in the Edo era, when the demand for plaster walls increased. While many creative techniques and materials have been developed in Europe, where there is a long history of stucco decorations, their materials are different from those in Japan. Thus, we agreed to add the data of additives, which have been used in each country and region, as well as in different periods, as the comparative target items in our ongoing research and create a database of them.

In relation to these findings, we plan to pursue our research on how the constituents included in various additives chemically affect stucco decorations. Different materials, their natures, and the techniques used to create stucco decorations, have different impacts on the deterioration due to aging as well as how the decoration is damaged over a long period. These studies are extremely important for determining the most suitable methods for their conservation and restoration.

This research and survey began with the focus on stucco decorations. However, our deep analysis of their history enabled us to recognize the close relationship with clay statues. We plan to expand our research on the clay statues that share many common materials and creation techniques and pursue research on how to conserve them and preserve their heritage in the most suitable ways.

(MAEKAWA Yoshifumi, Japan Center for International Cooperation in Conservation)



平成29（2017）年に修復を終えたミケランジェロ作の塑像『河の神』“Dio Fluviale”（Casa Buonarroti所蔵）
“Dio Fluviale”, a clay statue by Michelangelo Buonarroti, the restoration of which was completed in 2017 (Casa Buonarroti Collection)

国 文化遺産国際協力コンソーシアムによる「アフガニスタンの文化遺産保護に関する緊急声明」の発表




この記事はインターネットでも読むことができます。

アフガニスタン国内における急激な情勢の変化を受け、本研究所が文化庁より事務局運営を受託している文化遺産国際協力コンソーシアムは、令和3（2021）年8月18日付で「アフガニスタンの文化遺産保護に関する緊急声明」を発表しました。全文は以下の通りです。コンソーシアムでは引き続き、関係機関との連携を図りながら現地の情報を収集するとともに、文化遺産保護のための協力に尽力していきます。

「アフガニスタンの文化遺産保護に関する緊急声明」

政情の急変というアフガニスタンの大きな変革期のなか、同国に所在する歴史的文化遺産、とりわけ遺跡や博物館を標的とする不法な略奪や破壊活動が強く懸念される状況となっています。私どもは、貴重な文化遺産が重大な危機にさらされる可能性に対し、深刻な憂慮の念を抱いています。

文化遺産国際協力コンソーシアムは、我が国が文化遺産保護分野の国際協力において一層の役割を果たすため、関係機関や専門家の連携を推進することを目的として設立されました。2001年以来、アフガニスタンでの活動は、我が国が取り組んできた文化遺産国際協力の歴史の中でも主要な柱の一つとなっており、これまでアフガニスタンや国際機関などと協力して、同国の文化遺産保護に大きな成果をあげてきました。



文化遺産国際協力コンソーシアム

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43

Tel: 03-3823-4841

Fax: 03-3823-4027

<https://www.jcic-heritage.jp/>

アフガニスタンの文化遺産保護に関する緊急声明

政情の急変というアフガニスタンの大きな変革期のなか、同国に所在する歴史的文化遺産、とりわけ遺跡や博物館を標的とする不法な略奪や破壊活動が強く懸念される状況となっています。私どもは、貴重な文化遺産が重大な危機にさらされる可能性に対し、深刻な憂慮の念を抱いています。

文化遺産国際協力コンソーシアムは、我が国が文化遺産保護分野の国際協力において一層の役割を果たすため、関係機関や専門家の連携を推進することを目的として設立されました。2001年以来、アフガニスタンでの活動は、我が国が取り組んできた文化遺産国際協力の歴史の中でも主要な柱の一つとなっており、これまでアフガニスタンや国際機関などと協力して、同国の文化遺産保護に大きな成果をあげてきました。

文化遺産は人類の歴史を語る共有の宝であるとともに、国民の統合とアイデンティティーの拠り所として、また地域や国家の発展のためにも重要な役割を果たすことが広く認識されています。文化遺産に対する略奪や破壊を未然に防ぐために、すべての勢力や個人に対し、節度を保った冷静な行動を強く求めます。また、世界の人々とこのような憂慮を共有したいと思います。

ここに、アフガニスタンの文化遺産を保護するための協力への強い意志を表明するとともに、アフガニスタンのすべての人々の安全と一刻も早い状況の安定化を願ってやみません。

2021年8月18日

文化遺産国際協力コンソーシアム
会長 青柳 正規

文化遺産は人類の歴史を語る共有の宝であるとともに、国民の統合とアイデンティティーの拠り所として、また地域や国家の発展のためにも重要な役割を果たすことが広く認識されています。文化遺産に対する略奪や破壊を未然に防ぐために、すべての勢力や個人に対し、節度を保った冷静な行動を強く求めます。また、世界の人々とこのような憂慮を共有したいと思います。

ここに、アフガニスタンの文化遺産を保護するための協力への強い意志を表明するとともに、アフガニスタンのすべての人々の安全と一刻も早い状況の安定化を願ってやみません。

2021年8月18日

文化遺産国際協力コンソーシアム

会長 青柳 正規

（文化遺産国際協力センター・藤井郁乃）

「アフガニスタンの文化遺産保護に関する緊急声明」（日本語版）

The Urgent Statement on the Protection of Cultural Heritage in Afghanistan (Japanese Version)

The Urgent Statement on the Protection of Cultural Heritage in Afghanistan by JCIC-Heritage



This article can also be read on the internet.

Due to the dramatic change in the political situation of Afghanistan, JCIC-Heritage (Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage), which our research institute has been commissioned to manage by the Agency for Cultural Affairs, released the Urgent Statement on the Protection of Cultural Heritage in Afghanistan on 18th of August, 2021. The whole sentences are as below. JCIC-Heritage will continuously collaborate with the related organizations and make every effort for the protection of cultural heritage in Afghanistan.

“Urgent Statement on the Protection of Cultural Heritage in Afghanistan”

Due to the rapid change in the political situation of Afghanistan, there is strong concern about the likelihood of looting and destruction targeting the country’s historical cultural heritage, especially archaeological sites, and museums.

The Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage (JCIC-Heritage) is extremely concerned that the irreplaceable cultural heritage of Afghanistan is in great danger.

The consortium was established to promote collaboration among related organizations and experts in Japan and facilitate a greater Japanese role in international cooperation in the field of cultural heritage protection. Since 2001, activities in Afghanistan have been a critical pillar in the history of Japan’s international cooperation in cultural heritage, which have achieved significant results by cooperating with Afghanistan, other countries, and international organizations.

It is widely recognized that cultural heritage is a common treasure that tells the history of humanity. Cultural

heritage also plays an important role as a source of national unity and identity, as well as facilitating regional and national development. Wishing to prevent any attacks on cultural heritage and mitigate its illicit transfer, we urge all parties and individuals concerned to act in a calm and considered manner. We also would like to share our concerns with the international community.

JCIC-Heritage hereby express our strong resolution to continue offering support for the protection of Afghanistan’s cultural heritage. We hope that the people of Afghanistan will be able to live in safety and security, and that the current situation will be stabilized as soon as possible.

August 18th, 2021

AOYAGI Masanori

Chair Person of JCIC-Heritage

(FUJII Ikuno, Japan Center for International Cooperation in Conservation)

「アフガニスタンの文化遺産保護に関する緊急声明」（英語版）

The Urgent Statement on the Protection of Cultural Heritage in Afghanistan (English Version)



Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage

13-43, Utsukom, Taito-ku, Tokyo

TEL: +81-(0)3-3823-4841

FAX: +81-(0)3-3823-4027

<https://www.jcic-heritage.jp/>

Urgent Statement on the Protection of Cultural Heritage in Afghanistan

Due to the rapid change in the political situation of Afghanistan, there is strong concern about the likelihood of looting and destruction targeting the country’s historical cultural heritage, especially archaeological sites, and museums.

The Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage (JCIC-Heritage) is extremely concerned that the irreplaceable cultural heritage of Afghanistan is in great danger.

The consortium was established to promote collaboration among related organizations and experts in Japan and facilitate a greater Japanese role in international cooperation in the field of cultural heritage protection. Since 2001, activities in Afghanistan have been a critical pillar in the history of Japan’s international cooperation in cultural heritage, which have achieved significant results by cooperating with Afghanistan, other countries, and international organizations.

It is widely recognized that cultural heritage is a common treasure that tells the history of humanity. Cultural heritage also plays an important role as a source of national unity and identity, as well as facilitating regional and national development. Wishing to prevent any attacks on cultural heritage and mitigate its illicit transfer, we urge all parties and individuals concerned to act in a calm and considered manner. We also would like to share our concerns with the international community.

JCIC-Heritage hereby express our strong resolution to continue offering support for the protection of Afghanistan’s cultural heritage. We hope that the people of Afghanistan will be able to live in safety and security, and that the current situation will be stabilized as soon as possible.

18th August, 2021

Masanori AOYAGI
Chair Person of JCIC-Heritage

情 創造美育協会の活動とアーカイブ—第5回文化財情報資料部研究会の開催



この記事はインターネットでも読むことができます。

“創造美育協会”という団体をご存知でしょうか。昭和27（1952）年、児童の個性を伸ばす新しい美術教育を目標にかかげて創設された民間団体で、北川民次や瑛九といった美術家、評論家の久保貞次郎がその設立に深く関わりました。その運動は全国に支部を構えるほどに発展し、戦後の日本美術教育の歴史に大きな影響を及ぼしています。

令和3（2021）年9月24日に開催された文化財情報資料部研究会では、この創造美育協会の本部事務局長を長年務めた美術教育者の島崎清海（1923-2015）が遺した資料をめぐって、中村茉莉氏（神奈川県立歴史博物館非常勤（会計年度職員）・東京経済大学図書館史料室臨時職員）に「「創造美育協会」の活動記録にみる戦後日本の美術教育—島崎清海資料を手掛かりに」の題でご発表いただきました。生前の島崎より聞き取りを行っていた中村氏は、その没後も遺された膨大な資料の整理と調査に当たってこられました。発表では創造美育協会の活動記録や刊行物、島崎に宛てられた書簡などの紹介を通して、同協会が美術教育の他、美術家支援、版画の普及、コレクター育成といった面でも大きな役割を果たしたことが示されました。

発表後のディスカッションでは、茨城大学名誉教授の金子一夫氏より戦後の美術教育における創造美育協会の位置づけについてコメントをいただきました。その後、島崎清海資料の今後の保存活用をめぐって所内外の出席者の間で意見が交わされましたが、資料を恒久的に伝える受け入れ機関がなかなか見つからないなど、美術教育を対象とするアーカイブの厳しい現状が議論からうかがえました。研究会では実際の資料の数々を中村氏に持参いただき、出席者の方々にご覧いただく機会を設けましたが、この度の研究会がこうした資料群の重要性を再認識する場となったのであれば幸いです。

（文化財情報資料部・塩谷純）



教室内の島崎清海 1950年代撮影
創造美育協会を支えた島崎は、自ら小学校の教師として図画等を教えていました。

Shimazaki Kiyomi in a classroom; photo taken in 1950s.
He taught arts as an elementary school teacher, while playing a key role in Sōzō Biiku Kyōkai



瑛九・島崎清海共著
『やさしい銅版画の作り方 美術教育のために』（門書店、1956年）表紙

戦前戦後にかけて前衛的な制作活動を行なった瑛九（1911-1960）は島崎と親交を結び、ともに銅版画の普及に努めました。

Front cover of “Easy Etching - For art education” by Ei-Q and Shimazaki Kiyomi (Kado Shoten 1956)

Ei-Q (1911-1960), who made avant-garde art creations in the pre- and post-war period, formed a friendship with Shimazaki and worked together to promote etching.

Activities and Archives of the Sōzō Biiku Kyōkai: the 5th Seminar Held by the Department of Art Research, Archives and Information Systems



This article can also be read on the internet.

Have you ever heard about an organization called “Sōzō Biiku Kyōkai”? This private organization was founded in 1952 to pursue new art education that respects and nurtures children’s individual personalities. Artists such as Kitagawa Tamiji and Ei-Q, and the art critic Kubo Sadajiro played key roles in its founding. These educational activities have grown and expanded, and have resulted in the establishment of the organization’s branches all over Japan. Thus, these activities have had a huge impact on post-war art education in Japan.

Ms. NAKAMURA Maki (part-time employee, Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History and temporary staff, Tokyo Keizai University Historical Data Office) was invited by the Department of Art Research, Archives and Information Systems to the seminar held on September 24th, 2021 on the materials left behind by Shimazaki Kiyomi (1923–2015). Shimazaki was an art educator and served as the Bureau Chief of the Sōzō Biiku Kyōkai. Ms. NAKAMURA gave a presentation titled “Art Education in Japan after World War II, tracked with the activity records of the ‘Sōzō Biiku Kyōkai’ – referring to the materials left by Shimazaki Kiyomi.” She had interviewed Shimazaki in the past, and after his death, has been engaged in organizing and studying the large amount of materials he had left behind. She explained that this organization has made immense contributions, not only by helping art education to evolve, but also by supporting artists, popularizing print arts, and nurturing art collectors.

In the discussion following her presentation, Dr. KANEKO Kazuo, Professor Emeritus at Ibaraki University, delivered a commentary on the positioning of the Sōzō Biiku Kyōkai in post-war art education in Japan. Following this, participants from the institute and other facilities actively discussed how to conserve and utilize the materials of Shimazaki Kiyomi. In the discussion, we also recognized the difficult situation related to the art education archives, for example, the fact that no institute so far has accepted these materials permanently.

Ms. NAKAMURA brought some of the actual materials to the seminar and participants had an opportunity to see them in person. We hope that this seminar provided the participants an opportunity to understand the importance of these materials.

(SHIOYA Jun, Department of Art Research, Archives and Information Systems)



研究会発表の様子

Presentation at the seminar



創造美術協会資料、閲覧の様子

Seminar participants browsing the materials of Sōzō Biiku Kyōkai

情 世界遺産条約の履行に関する最近の国内外の動向―第6回文化財情報資料部研究会の開催



この記事はインターネットでも読むことができます。

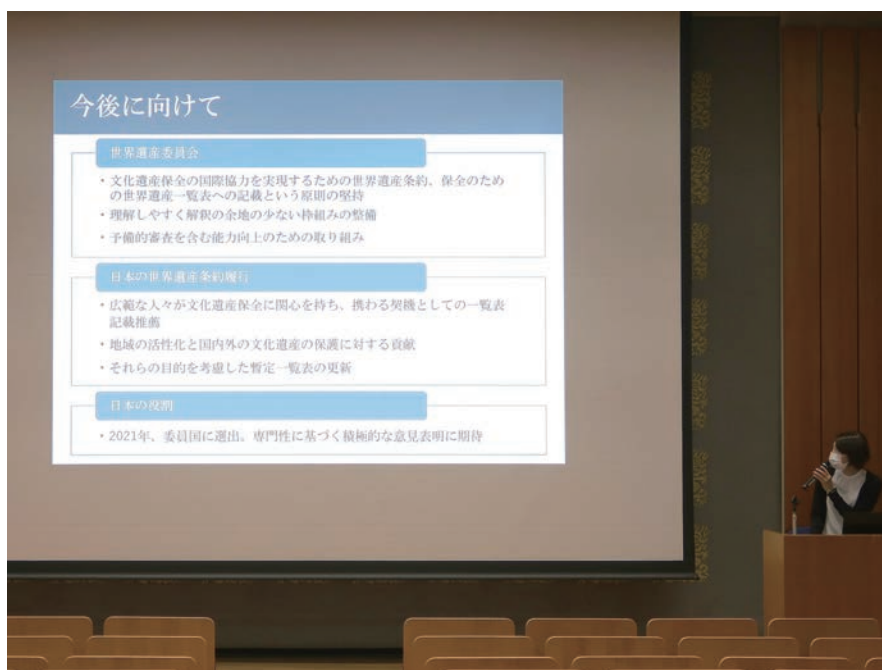
世界遺産条約を日本が批准して30年近くが経ちました。令和3（2021）年には「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」「北海道・北東北の縄文遺跡群」が加わり、日本の世界遺産は現在25件を数えます。令和3（2021）年11月30日の第6回文化財情報資料部研究会では、二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長）が、世界遺産の推薦や決定、保護といった、世界遺産条約に基づく最近の国内外での活動について報告しました。

令和3（2021）年7月に中国・福州及びオンラインで開催された拡大第44回世界遺産委員会では、諮問機関に世界遺産一覧表への記載を勧告されなかった推薦資産の多くが、世界遺産委員会で記載を決議されました。例えば、ハンガリーなど4か国が推薦した「ローマ帝国の国境線：ドナウリメス（西側部分）」は、ハンガリーの脱退で世界遺産委員会直前に資産範囲が大きく変わり、文化遺産の諮問機関であるICOMOSが評価不能としたものの記載が決議されています。ただ、この推薦に関しては、ICOMOSが過去に実施したテーマ別研究の結果と、推薦を受けてICOMOSが行った現地調査に基づく勧告の内容とに齟齬があり、勧告への対応について関係締約国間の調整がつかなかったことがハンガリーから指摘されており、ICOMOSに対する委員国の反発を生んだ可能性もあります。拡大第44回世界遺産委員会に関して、このような世界遺産一覧表への記載推薦に関する問題とともに、推薦書の予備的審査などの改善策も導入されたことを報告しました。

世界遺産委員会の動きとは別に、国内では令和2（2020）年から、文化審議会世界文化遺産部会による日本の世界遺産の推薦や保護の在り方に関する検討が行われています。この検討内容についても、ウェブ公開されている資料に基づき報告を行いました。

研究会では、国内における世界遺産推薦や保護に関する活動の課題を中心に議論が行われ、広範な関連情報発信の必要性も感じられる機会となりました。

（文化財情報資料部・二神葉子）



研究会のまとめ
Summary of the Seminar

Recent International and Domestic Trends on the Implementation of the World Heritage Convention: the 6th Seminar held by the Department of Art Research, Archives and Information Systems



This article can also be read on the internet.

Nearly 30 years have passed since Japan ratified the World Heritage Convention. Japan currently has 25 properties inscribed on the World Heritage List, including “Amami-Oshima Island, Tokunoshima Island, Northern part of Okinawa Island, and Iriomote Island” and “Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan”, which were recently added to the list in 2021. FUTAGAMI Yoko, Head, Cultural Properties Information Section, conducted a presentation about the recent international and domestic activities based on the World Heritage Convention, including the nomination, inscription, and protection.

Many nominated properties that were not recommended to inscribe on the World Heritage List by its advisory bodies, were eventually decided to be inscribed on the List at the extended 44th session of the World Heritage Committee conducted in Fuzhou, China, with both in-person and online attendees in July 2021. For example, “Frontiers of the Roman Empire – The Danube Limes (Western Segment)” nominated by Hungary and other states, was also decided to be inscribed on the list. This happened even though ICOMOS / International Council on Monuments and Sites, as an advisory body on cultural properties, concluded that it was “impossible to evaluate” because its boundary of the property was significantly modified soon before the session due to Hungary’s withdrawal from its nomination. Hungary noted discrepancies between the outcomes of the thematic study that ICOMOS performed in the past and their recent advice based on the mission triggered by its nomination, and the related states failed to reach agreements regarding how to deal with the advice provided. These hiccups may have influenced the Committee Member states to turn against ICOMOS. FUTAGAMI explained these issues related to the nominations to the World Heritage List, as well as the introduction of improvement measures, such as Preliminary Evaluation on the nomination dossiers at the extended 44th session of the World Heritage Committee.

In addition to the movements of the World Heritage Committee, since 2020, domestic discussions have been conducted in Japan at the Subdivision of World’s Cultural Heritage of the Council for Cultural Affairs regarding the nomination and protection of world heritage properties. FUTAGAMI presented information about its discussion points based on the materials published on the Internet.

Active discussions were conducted during this seminar on the challenges for domestic activities in the light of World Heritage nomination and protection. It provided a good opportunity for us to recognize the need for outreach on a wide range of related information.

(FUTAGAMI Yoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems)



「北海道・北東北の縄文遺跡群」構成資産の御所野遺跡

Goshono Site, a component property of the Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan

情報 報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究—ワット・ラーチャプラディットの漆扉』の刊行



この記事はインターネットでも読むことができます。

東京文化財研究所は平成4（1992）年から、タイの文化財の保存修復に関する共同研究をタイ文化省芸術局と実施しています。その一環として、タイ・バンコクに所在する王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディット（1864年建立）の漆扉について、当該寺院や芸術局などのタイの関係者による修理事業の実施に際して技術的な支援を行ってきました。

文化財の修理にあたっては、個々の文化財の材料や技法、周辺環境や劣化状態を詳細に調査して方針

を決め、進めなければならないことから、それらに関する科学的な調査が不可欠です。ところで、ワット・ラーチャプラディットの漆扉には、19世紀半ばを中心に日本からの輸出漆器に多く用いられた伏彩色螺鈿の技法による、花鳥や山水、和装の人物などの図柄が見られ、日本製であると考えられました。しかし、その確たる証拠はなく、生産地や同様の技法による作品の系譜への位置づけなども不明でした。そこで、科学的な調査や、伏彩色螺鈿及び彩漆蒔絵で表現された図柄に関する調査を、東京文化財研究所内外の様々な分野の専門家が行ったところ、材料の成分や製作技法だけでなく、図柄の表現からも、漆扉が日本で制作された可能性が極めて高いことがわかりました。

令和3（2021）年3月に刊行した標記の報告書は、これらの研究成果とともに、多分野の専門家による文化財調査の全容をご理解いただける内容となっています。報告書は当研究所の資料閲覧室や公共図書館などでご覧になれますので、お手に取っていただけましたら大変幸いです。

（文化財情報資料部・二神葉子）



ワット・ラーチャプラディットの漆扉。上下に伏彩色螺鈿、中央に彩漆蒔絵で装飾されたスギ材が配置されている。

Lacquer Door Panels of Wat Rajpradit - mother-of-pearl with underpainting is seen in both the upper and lower parts, and cedar material decorated with colored lacquer *maki-e* is found in the middle portions.

Issuance of the Report “Study of the Japan-made Lacquerwork found in Thailand – Lacquer Door Panels of Wat Rajpradit”



This article can also be read on the internet.

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) has been conducting a joint study to preserve the cultural heritage of Thailand in collaboration with the Fine Arts Department, Ministry of Culture of Thailand (FAD), since 1992. As a part of this joint study, we have been providing technical support through related parties in Thailand, including the Temple and FAD, for the restoration project related to the lacquer door panels at Wat Rajpradit, the first-grade royal Buddhism temple built in 1864.

Restoration of cultural heritage requires devising a plan based on detailed research on materials, techniques, surrounding environment, and deterioration status of each cultural heritage, and the restoration work needs to proceed according to the plan. Hence, relevant scientific investigation on the cultural heritage in question is crucial. Lacquer door panels at Wat Rajpradit were believed to be made in Japan because they have designs of flowers and birds, landscapes, and figures wearing Japanese kimonos, and they feature work in mother-of-pearl with underpaint techniques, which were often used in lacquerware exported from Japan in the mid-19th century. However, there was neither concrete evidence nor clues regarding their producers and their positioning in the history of such techniques. Therefore, numerous experts in various fields from TOBUNKEN and other organizations conducted scientific investigations and research studies on the designs expressed in mother-of-pearl with underpainting and colored lacquer *maki-e*. According to these studies, the material ingredients, techniques, and design elements found in the lacquer door panels strongly suggest that they were made in Japan.

The report “Study of the Japan-made Lacquerwork found in Thailand – Lacquer Door Panels of Wat Rajpradit,” published in Japanese in March 2021 assists in understanding these research outcomes and provides an overview of the interdisciplinary research on cultural heritage. This report is accessible in the TOBUNKEN Library, public libraries in Japan, and some libraries in overseas museums that have collections of Japanese artworks. We hope that you will read it.

(FUTAGAMI Yoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems)



報告書の表紙

Front Cover of the Report

情 和泉市久保惣記念美術館での講演とリートベルク美術館のシンポジウムでの発表



この記事はインターネットでも読むことができます。

すぐれた日本東洋の古美術コレクションで知られる和泉市久保惣記念美術館で「土佐派と住吉派 其の二—やまと絵の展開と流派の個性—」展（令和3（2021）年9月12日～11月7日）が開催されました。この展覧会では桃山時代の土佐光吉から近代に至るまでの、土佐派・住吉派の作品が一堂に会され、それぞれの絵師が守り継いだものと、革新していったものが、浮かび上がる企画となっていました。本展にあわせて10月16日に行われた講演会にて、同館の館長河田昌之氏とともに、文化財情報資料部・江村知子が「海を渡った住吉派絵画—ライプツィヒ民族学博物館蔵「酒呑童子絵巻」を中心に」と題して発表しました。当研究所ですすめている在外日本古美術品保存修復協力事業や、海外に所蔵される日本美術作品について紹介し、天明6（1786）年に制作されたと考えられる住吉廣行筆「酒呑童子絵巻」について解説しました。この展覧会には住吉廣行の長男の弘尚が、父の作品に倣って制作したと考えられる「酒呑童子絵巻」（根津美術館蔵）が出陳されており、その対照性についても明らかにしました。

またスイスのリートベルク美術館ではヨーロッパの美術館に所蔵される物語絵画を集めた《Love, Fight, Feast – the World of Japanese Narrative Art》展（令和3（2021）年9月10日～12月5日）にあわせて10月23日に国際シンポジウムが開催され、江村は《A Great Tale of Exterminating Ogres: Shuten-dōji Handscrolls of GRASSI Museum für Völkerkunde zu Leipzig》と題して基調講演を行いました。この展覧会で住吉廣行筆「酒呑童子絵巻」が初公開されたこともあり、絵巻全体の内容と作品の特色について明らかにしました。シンポジウムはチューリッヒの会場と、東京、ダブリン（アイルランド）、ニューヨーク（米国）をつないで、オンライン形式で行われ、インターネットで配信されました。

https://www.youtube.com/watch?v=36FC6IOS_o0&t=1160s

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、参加者全員が同じ場所に集まることはできませんでしたが、多くの研究者と意見交換する貴重な機会となりました。発表で取り上げた住吉廣行筆「酒呑童子絵巻」については、研究資料として『美術研究』435号に掲載しました。

（文化財情報資料部・江村知子）



2つの展覧会図録

Exhibition catalogues: “Love, Fight, Feast” (left) and “Tosa and Sumiyoshi Schools II—The Development of the Yamato-e Painting Style and the Outstanding Characteristic of Each School” (right)

Lecture at Kubosō Memorial Museum of Arts, Izumi and Keynote Speech at the International Symposium in Rietberg Museum, Switzerland



This article can also be read on the internet.

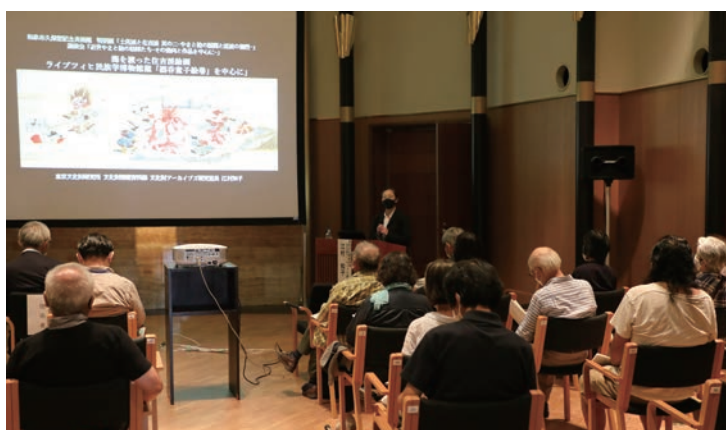
The exhibition “Tosa and Sumiyoshi Schools II—The Development of the Yamato-e Painting Style and the Outstanding Characteristic of Each School” was held from September 12th through November 7th, 2021 at the Kubosō Memorial Museum of Arts, Izumi, well known for its precious collection of Japanese and East Asian antiquities. The art works of the Tosa and Sumiyoshi Schools, from Tosa Mitsuyoshi’s work in the Momoyama Period till the modern period, were gathered and exhibited there. The exhibition was curated to highlight what each painter inherited and what each one innovated. During the exhibition, EMURA Tomoko from the Department of Art Research, Archives and Information Systems gave a lecture titled “Sumiyoshi School Paintings Overseas: Examining Shutendōji Handscrolls in Grassi Museum of Ethnology in Leipzig” at a lecture meeting held on October 16th, with Mr. KAWADA Masayuki, the director of the museum. EMURA introduced the Cooperative Program for the Conservation of Japanese Art Objects Overseas by Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN), as well as Japanese arts overseas. She discussed Sumiyoshi Hiroyuki’s Shuten-dōji handscrolls, considered to be painted in 1786. This exhibition also featured the Shuten-dōji handscrolls painted by Hiroyuki’s son, Sumiyoshi Hironao (owned by Nezu Museum), following his father’s works. EMURA clarified the contrast between their works.

In the same month, on October 23rd, EMURA delivered a keynote speech titled “A Great Tale of Exterminating Ogres: Shuten-dōji Handscrolls of GRASSI Museum für Völkerkunde zu Leipzig” at an international symposium marking the occasion of the special exhibition “Love, Fight, Feast - The World of Japanese Narrative Art,” held at the Rietberg Museum in Switzerland from September 10th to December 5th, 2021. The exhibition shows Japanese narrative scrolls owned by European museums. In her speech, she explained the overall contents of Sumiyoshi Hiroyuki’s Shuten-dōji handscrolls and their characteristics as they were first exhibited there. This symposium was held online, connecting the museum in Zurich with Tokyo, Dublin (Ireland) and New York (USA), and broadcasted via the Internet.

https://www.youtube.com/watch?v=36FC6IOS_o0&t=1160s

It was unfortunate that we could not gather in person at the same venue due to the COVID-19 pandemic, but it was still a precious opportunity to discuss with many researchers and to exchange opinions. Her research about Sumiyoshi Hiroyuki’s Shuten-dōji handscrolls, was published, as an article in *the Bijutsu Kenkyu* (the Journal of Art Studies), No.435.

(EMURA Tomoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems)



和泉市久保惣記念美術館での講演会

Lecture at Kubosō Memorial Museum of Arts, Izumi



リートベルク美術館でのシンポジウム (YouTubeでの配信画面)

Symposium at the Rietberg Museum (YouTube distribution screen)

情 Art news articles の公開について



この記事はインターネットでも読むことができます。

東京文化財研究所では、昭和11（1936）年より日本の美術界の活動を一年ごとにまとめた『日本美術年鑑』を刊行しております。同年鑑は「東京文化財研究所刊行物リポジトリ - 『日本美術年鑑』 (https://tobunken.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=873)」から一冊ずつPDFファイルでダウンロードできますが、当研究所のウェブデータベースで掲載された情報を直接検索いただくこともできます。

さて、同年鑑をもとに構築されたデータベースの一つである「美術界年史（彙報）データベース (<https://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi>)」は、昭和11（1936）年から現在に至るまでの美術界の動向を主要な展覧会や美術賞、美術館や文化財に関係する出来事から追うことのできる資料の一つです。この度、平成25（2013）年より共同研究を行っているイギリスのセインズベリー日本藝術研究所（Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures; SISJAC）のご協力を得て、同研究所スタッフの林美和子氏に同データベースの平成25（2013）年、平成26（2014）年、平成27（2015）年分の記事を英語に翻訳いただき「Art news articles (<https://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi-en>)」として公開することができました。今後、翻訳の進捗に合わせて随時、データを追加して参ります。

同データベースの英語訳は、これまでの日本の美術界の歩みを海外に伝える上で大きな助けとなるものです。しかしそれだけではなく新たな情報発信のためのボキャブラリーとしても大いに役立つと考えております。日本語と英語の記事の双方を容易に利用できるよう記事単位でリンクを作成しましたが、訳語の単位でも双方を連携できるような改修を検討しておりますので、継続的にご利用いただければ幸いです。

（文化財情報資料部・小山田智寛）

about

Preface

General Information

Update History

categories

years

search

Exhibitions to Commemorate the 400th Anniversary of Rinpa

number:05284
years:October 2015

The year 2015 marks the 400th anniversary of the opening of the art village, later called 'Kōetsu Village' in Takagamine, Kyoto in 1615 by HON'AMI Kōetsu, one of artists thought to have inspired the founding of Rinpa, and the 300th anniversary of the death of OGATA Kōrin. Exhibitions that commemorate the occasion were organized across the nation. In Kyoto, several cultural events titled 'Rimpa 400 Year Celebration Festival' were organized, including 'Rimpa: The Aesthetics of the Capital' at the Kyoto National Museum (October 10 – November 23) and '400th Anniversary of the Rinpa School: The "RINPA" Image' at the National Museum of Modern Art, Kyoto (October 9 – November 23). In addition, 'Kōrin and Modern Art' was held at the MOA Museum of Art (February 4 – March 3) and 'Irises and Red and White Plum Blossoms: The Secret of Kōrin's Design' was held at the Nezu Museum (April 18 – May 17), at both of which 'Irises' (Nezu Museum collection) and 'The Red and White Blossoms' (MOA Museum of Art collection) were exhibited together. Outside of Japan, the Freer Gallery of Art & Arthur M. Gallery organized an exhibition titled 'Sōtatsu: Making Waves' (October 24 – January 31, 2016). ([Japanese](#))

created : 27/10/2021
modified : 27/10/2021 ([Update History](#))

戻る

本文末尾の「([Japanese](#))」にて日本語の記事にリンクしている
 “([Japanese](#))” at the end of the article is linked to its Japanese article.

Publication of Art News Articles



This article can also be read on the internet.

Since 1936, the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) has annually issued the “Year Book of Japanese Art (the Year Book),” which covers activities in the art world in the given year in Japan. Although this book can be downloaded from “TOBUNKEN Publications repository > Yearbook of Japanese Art*1,” you can also directly search for specific information on the TOBUNKEN web database.

“Art News Articles database*2,” one of the databases constructed based on the Year Book, is a useful material that allows you to track movements in the art world through major exhibitions, art competitions, and events related to museums and cultural properties since 1936. We are happy to announce that the English version of “Art News Articles*3” with articles dating back to 2013, 2014, and 2015 were published. They were translated by Ms. Miwako Hayashi Bitmead, Japanese Arts Database Officer of the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (SISJAC) in the United Kingdom. SISJAC and TOBUNKEN have conducted joint research since 2013 and this English publication was created with their cooperation. As the translation progresses, more data will be available.

The English version of this database will be helpful for disseminating information all over the world about the history of the movement in the Japanese art world until now. We believe that it can be also used as a vocabulary glossary for further outreach activities. Japanese and English versions of articles are mutually linked to ensure that each version can be easily referred. We are also planning to improve the database to mutually refer to both English and Japanese at a vocabulary level. We hope that you can find it useful and will use them regularly.

(OYAMADA Tomohiro, Department of Art Research, Archives and Information Systems)

*1 https://tobunken.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=873

*2 <https://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi>

*3 <https://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi-en>

美術会年史（彙報）			
管理番号	年代	年	年月
05284	2010	2015	2015年10月
タイトル_日	琳派400年を記念した展覧会の開催		
本文_日	2015年は琳派の祖の一人、本阿弥光悦が1615（元和元）年に京都の鷹室で、後年「光悦村」と呼ばれる芸術村を開いて400年、また尾形光琳の300年忌にも当たることから、京都をはじめとする各所で記念の展覧会が開催された。京都では「琳派四百年記念祭」として各種の文化事業が執り行なわれ、京都国立博物館では「琳派京を彩る」展（10月10日～11月23日）、京都国立近代美術館で「琳派イメージ展」（10月9日～11月23日）等が開催された。またMOA美術館で「光琳アート光琳と現代美術」展（2月4日～3月3日）、根津美術館で「燕子花と紅白梅光琳デザインの秘密」展（4月18日～5月17日）が開催、両展では光琳の「燕子花図屏風」（根津美術館蔵）と「紅白梅図屏風」（MOA美術館蔵）が揃って展示された。海外では、米国ワシントンDCのフリーア／サックラー美術館で「Sotatsu : Making Waves（宗達：創造の波）」展（10月24日～2016年1月31日）が開催された。		
タイトル_英	Exhibitions to Commemorate the 400 th Anniversary of Rinpa		
本文_英	The year 2015 marks the 400 th anniversary of the opening of the art village, later called 'Kōetsu Village' in Takagamine, Kyoto in 1615 by HON'AMI Kōetsu, one of artists thought to have inspired the founding of Rinpa, and the 300 th anniversary of the death of OGATA Kōrin. Exhibitions that commemorate the occasion were organized across the nation. In Kyoto, several cultural events titled 'Rimpa 400 Year Celebration Festival' were organized, including 'Rimpa: The Aesthetics of the Capital' at the Kyoto National Museum (October 10 – November 23) and '400 th Anniversary of the Rinpa School: The "RINPA" Image' at the National Museum of Modern Art, Kyoto (October 9 – November 23). In addition, 'Kōrin and Modern Art' was held at the MOA Museum of Art (February 4 – March 3) and 'Irises and Red and		

元データの管理画面（日英の記事を一括管理している）

Administration screen of the original articles database, managing the original articles written in Japanese along with their corresponding English translations

国 第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」の開催



この記事はインターネットでも読むことができます。

今日、文化遺産に付随する情報をデータベースに記録することが、デジタルアーカイブをはじめとした記録技術の進化によって可能になるとともに、様々な地域特有の情報をデータベース上で継続的に収集するといった双方向的な取り組みも始まっています。文化遺産にまつわる情報の保存と継承の望ましいあり方を考え、この分野での今後の国際協力の可能性についても議論するため、文化遺産国際協力コンソーシアム（本研究所が文化庁より事務局運営を受託）は、令和3（2021）年8月9日にウェビナー「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」を開催しました。

齋藤玲子氏（国立民族学博物館）による「フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトとアイヌ民族資料の活用」、無形民俗文化財研究室長・久保田裕道による「無形文化遺産に関わる情報の記録と活用について」、林憲吾氏（東京大学）による「アジア近代建築遺産データベースの40年：その展開・変容・課題」の3講演が行われ、続くパネルディスカッションでは、近藤康久氏（総合地球環境学研究所）の司会のもとデータベースに記録する対象やデータベース作成を通じた国際協力の可能性について議論されました。

文化遺産にまつわる情報をどう残し、誰に伝えるかという点において、より多くの立場の人々が関わるようになるとともに、その方法も多様化してきています。コンソーシアムでは引き続き、関連する情報の収集・発信に努めていきたいと思えます。

本研究会の詳細については、下記コンソーシアムのウェブページをご覧ください。

<https://www.jcic-heritage.jp/jcicheritageinformation20210625/>

（文化遺産国際協力センター・藤井郁乃）

第29回
文化遺産国際協力コンソーシアム研究会

文化遺産 にまつわる 情報の保存と継承

開かれたデータベースに向けて

2021年
8月9日(月・休)
14:00 ▶ 16:00 (13:45 接続開始)

会場：Zoom ウェビナー
参加費：無料（要事前登録）
申込方法：詳細はHPをご参照ください
<https://www.jcic-heritage.jp/>

- 開会挨拶・趣旨説明
岡田保良（国士舘大学 名誉教授）
- 「フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトとアイヌ民族資料の活用」
齋藤玲子（国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授）
- 「無形文化遺産に関わる情報の記録と活用について」
久保田裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形民俗文化財研究室長）
- 「アジア近代建築遺産データベースの40年：その展開・変容・課題」
林憲吾（東京大学生産技術研究所 准教授）
- ディスカッション：「文化遺産にまつわる情報の記録と国際協力への展望」
モデレーター：近藤康久（総合地球環境学研究所 准教授）
- 閉会挨拶
友田正彦（文化遺産国際協力コンソーシアム 事務局長）

第29回研究会「文化遺産にまつわる情報の保存と継承」

The 29th Seminar: "Preservation and Transmission of Information on Cultural Heritage"

The 29th JCIC-Heritage Seminar: “Retention and Succession of the Information associated with Cultural Heritage~For Whom and What Purpose~



This article can also be read on the internet.

Today, the progress of recording technology, including digital archives, has enabled storing the information on cultural heritage in databases and interactive efforts have been initiated to consistently collect (specific) information unique to different regions around the world.

In order to discuss appropriate ways of retaining and passing down information related to cultural heritage and possibilities of future international cooperation in this field, JCIC-Heritage (Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage, which our research institute has been commissioned to manage by the Agency for Cultural Affairs), held a webinar on August 9th, 2021, titled “Retention and Succession of the Information associated with Cultural Heritage~For Whom and What Purpose~”.

SAITO Reiko (National Museum of Ethnology) gave a lecture titled, “Info-Forum museum and Utilization of Ainu Ethnic Materials.” KUBOTA Hiromichi, Head of the Intangible Folk Cultural Properties Section, presented a lecture titled “Recording and Utilization of Information Related to Intangible Cultural Heritage.” HAYASHI Kengo (University of Tokyo) delivered a lecture titled “40 Years of the Asian Modern Architectural Heritage Database: Its Development, Transformation, and Challenges.” In the following panel discussion, the possibility of international cooperation through the creation of databases on cultural heritage and the type of information to be recorded in them was discussed between the panelists with KONDO Yasuhisa (Research Institute for Humanity and Nature) as the moderator.

Nowadays, more people with various backgrounds have concern regarding how to retain information related to cultural heritage and to whom it should be inherited. In addition, the methods and objectives for those matters have been diversified. JCIC-Heritage will continue to collect and disseminate relevant information.

See the following JCIC-Heritage web page for details about this seminar.

[https://www.jcic-heritage.jp/jcicheritageinformation20210625/\(Link\)](https://www.jcic-heritage.jp/jcicheritageinformation20210625/(Link))

(FUJII Ikuno, Japan Center for International Cooperation in Conservation)



第29回研究会の様子

The 29th Seminar in session

情 文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」の開催



この記事はインターネットでも読むことができます。

文化財を扱う博物館・美術館や自治体にとって、文字や写真による文化財や収蔵品の記録作成（ドキュメンテーション）は、調査研究・保存活用のための基礎的なデータを取得する活動です。文化財情報資料部文化財情報研究室では、このような文化財の記録作成の手法や、記録を整理・活用するためのデータベース化に関する情報発信を行っています。その一環として令和3（2021）年9月21日、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じたうえで、標記のセミナーを東京文化財研究所セミナー室で開催しました。

セミナーでは、「文化財保護と記録作成」と題して中野慎之氏（文化庁 文化財第一課 調査官（絵画部門））が、文化財保護にとっての記録の意味や、記録作成の際の留意点について、実例とともに豊富な資料に基づいて講演されました。また、シリーズ「デジタル画像の圧縮～画像の基本から動画像まで～」の第2回として、今泉祥子氏（千葉大学大学院工学研究院准教授）が、デジタル画像の圧縮とは何か、どのような処理を行うのか、さらに、JPEGやMPEGといった静止画や動画像の代表的な圧縮方式の基本的な技術について、「画像圧縮の概念と基本技術」のタイトルで講演を行いました。

新型コロナウイルス感染拡大により文化財にアクセスしづらくなっている現在、文化財の調査研究や鑑賞の機会を確保するための記録作成の意義はますます大きくなっています。私たちは今後も講義形式やハンズオン形式のセミナーを通じて、文化財に関する記録の作成や記録の保存・発信に役立つ情報を発信していきます。

（文化財情報資料部・二神葉子）



中野慎之氏による講演

Lecture by Mr. NAKANO Noriyuki

Seminar on the Documentation of Cultural Properties – “Documentation of Cultural Properties for Protection and the Principle of Image Compression”



This article can also be read on the internet.

To obtain fundamental data for their research, protection, and utilization, the documentation of cultural properties and artifacts through both texts and photographs is an important activity for museums, fine art museums, and municipal governments managing cultural properties. The Department of Art Research, Archives and Information Systems is actively discussing methods for documenting cultural properties as well as the compilation of a database to organize and utilize these documentations. To this end, we conducted a seminar titled “Documentation of Cultural Properties for Protection and the Principle of Image Compression,” on September 21st, 2021, in the seminar room at the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties while following the appropriate countermeasures against COVID-19 infection.

Mr. NAKANO Noriyuki (Senior Specialist of the First Cultural Properties Division, Agency for Cultural Affairs) delivered a lecture titled “Documentation of Cultural Properties for Protection.” He explained the importance of documenting cultural properties to ensure their protection and reiterated the areas of special care that must be taken into consideration during the documentation process, based on the abundance of materials with actual cases. In addition, Dr. IMAIZUMI Shoko (Associate Professor, Graduate School of Engineering, Chiba University) delivered a lecture titled “Concepts and Basic Technologies of Image Compression” as the second session in the series on “Digital Image Compression from the Basics of Images to Moving Images.” She explained digital image compression, the processes involved, and finally, the basic technologies and techniques of major compression formats for still and moving images, such as JPEG and MPEG.

The significance of documenting cultural properties continues to increase as it is crucial to securing opportunities for research and appreciation in the current situation wherein it is difficult to access cultural properties due to the COVID-19 pandemic. We will continue to actively disseminate useful information for documentation, preservation, and publication of cultural properties by providing lecture-style and hands-on seminars.

(FUTAGAMI Yoko, Department of Art Research, Archives and Information Systems)



今泉祥子氏による講演

Lecture by Dr. IMAIZUMI Shoko

情 第55回オープンレクチャーの開催



この記事はインターネットでも読むことができます。

文化財情報資料部では、毎年秋に広く一般の聴衆を募って、研究者の研究成果を講演する「オープンレクチャー」を開催しています。令和3（2021）年は新たに「かたちを見る、かたちを読む」のテーマのもと行われました。例年2日間にわたって外部講師を交えて開催してきましたが、令和2（2020）年同様、新型コロナウイルス感染防止の情勢から、内部講師2名による1日のみのプログラムとし、令和3（2021）年11月5日に、抽選制による30名限定の定員にて、検温、マスク、手指の消毒に配慮して開催いたしました。

令和3（2021）年は、文化財情報資料部日本東洋美術史研究室長・小林達朗による「皆金色阿弥陀絵像の出現とその意味—転換期の時代思潮の表象」、及び主任研究員・安永拓世による「香川・妙法寺の与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」—画像資料を活用した復原的研究—」の2講演が行われました。

小林からは、鎌倉時代の阿弥陀絵像にほどこされた金泥・金箔による皆金色という表現について、時代的思潮の転換、とくに天台本覚思想の出現にともなう阿弥陀への認識とのかかわりを中心とした講演が行われました。また、安永からは、香川県丸亀市の妙法寺に伝わる「寒山拾得図襖」（重要文化財）の経年による破損部分について、当研究所がかつて撮影したモノクロ写真及び新たに撮影した高精細画像をもちいた復原の試みが紹介されました。

聴衆へのアンケートの結果、参加者の85パーセントから「満足した」「おおむね満足した」との回答を得ることができました。

（文化財情報資料部・小野真由美）



講演風景（小林達朗）

Lecture by KOBAYASHI Tatsuro

The 55th Public Lecture



This article can also be read on the internet.

The Department of Art Research, Archives and Information Systems conducted a public lecture titled “Look at Form, Read Form” on November 5th, 2021. The “Public Lecture” is conducted every autumn over the course of two days, and a wide range of audiences are invited to attend lectures presented by researchers on their work. However, this year, as with the preceding year, we shortened the period to one day with only two lecturers from our institute to follow COVID-19 prevention measures. The audience was limited to 30 people, and they were selected by raffle. In the venue, temperature checks were conducted and the speakers and audiences were requested to wear masks and sanitize their hands.

The following two lectures were conducted by members of our department: “Emergence and its Meaning of Amida Paintings All in Gold – Representation of Time Spirit in Transition Period” by KOBAYASHI Tatsuro, Head, Japanese and East Asian Art History Section; and “‘Hanshan and Shide’ Painted by Yosa Buson at Myōhōji Temple in Kagawa – Study for Restoration Utilizing Image Materials” by YASUNAGA Takuyo, Senior Researcher.

“KOBAYASHI discussed the Amida pictures of the Kamakura period—painted and plated in all gold—in light of the transition of the time spirit. Special emphasis was placed on how Amida emerged alongside the doctrine of original enlightenment (*hongaku*), which dominated Tendai Buddhism.” YASUNAGA introduced the ongoing restoration work of “Hanshan and Shide”—an Important Cultural Property owned by the Myōhōji Temple in Marugame city, Kagawa Prefecture—which was partially damaged by age. The old monochrome films shot decades ago by TOBUNKEN have been used for this restoration with the high-definition images that TOBUNKEN pictured recently.

Questionnaire survey responses from the audience show that 85% participants were “satisfied” or “generally satisfied” with the lecture.

(ONO Mayumi, Department of Art Research, Archives and Information Systems)



講演風景（安永拓世）

Lecture by YASUNAGA Takuyo

保「文化財修復技術者のための科学知識基礎研修」の開催



この記事はインターネットでも読むことができます。

保存科学研究センターでは、文化財の修復に関して科学的な研究を継続してきています。令和3年度より、これらの研究で得た知見を含めて、文化財修復に必要な科学的な情報を提供する研修を開催することになりました。対象は文化財・博物館資料・図書館資料等の修復の経験のある専門家で、実際の現場経験の豊富な方を念頭に企画いたしました。

令和3（2021）年9月29日より10月1日までの3日間で開催し、文化財修復に必須と考えられる基礎的な科学知識について、実習を含めて講義を行いました。文化財修復に必要な基礎化学、接着と接着剤、紙の化学、生物被害への対応などの内容であり、東京文化財研究所の研究員がそれぞれの専門性を活かして講義を担当しました。

定員15名のところ、全国より44名のご応募を頂きましたが、新型コロナウイルス感染拡大の状況を考慮し、対象を東京都内に在住・通勤の方のみと限定し、その中から専門性などを考慮して15名の方にご参加頂きました。

開催後のアンケートでは、参加者の方達から、非常に有益であったとの評価をいただきました。今後さらに発展的な修復現場に関する科学的情報のご要望もいただき、これらのご意見を踏まえながら今後も同様の研修を継続する予定です。

（保存科学研究センター・早川典子）



実験器具の取り扱いに関する講義

Lecture on how to handle lab instruments

A Workshop on Basic Science for Conservators



This article can also be read on the internet.

The Center for Conservation Science conducts scientific research on the conservation and restoration of cultural property. In 2021, we introduced a workshop on basic science, based on our research, for conservators who have diverse experience in restoration of cultural properties and museum curation and archiving.

The workshop was held for three days from September 29th through October 1st, 2021. We provided lectures and practical sessions on basic scientific knowledge that is important for conservation and restoration. It included basic chemistry, science of adhesion and adhesives, chemistry of paper, and pest damage control. The researchers of Tokyo National Research Institute for Cultural Properties delivered the lectures, based on their areas of expertise.

We received 44 applications from across Japan for 15 seats. Fifteen applicants, who either resided in or commuted to Tokyo, and had the desirable expertise, participated in the workshop keeping in mind the on-going COVID-19 pandemic.

The participants expressed their appreciation for this workshop through the questionnaires that were provided. We received requests for further scientific information on more advanced conservation and restoration cases. We intend to continue this workshop series to meet these expectations.

(HAYAKAWA Noriko, Center for Conservation Science)



分子模型を使った材料化学の講義

Lecture on materials chemistry using 3D molecular models

人事異動

●令和3年11月1日付

区分	職名	氏名
採用	文化財情報資料部 アソシエイトフェロー	黒崎 夏央

受賞・表彰報告

- 保存科学研究センター修復計画研究室長・朽津信明、同センター客員研究員・宇高健太郎が「第14回文化財保存修復学会業績賞」を受賞しました。
- 保存科学研究センター研究員・倉島玲央、同センター修復材料研究室長・早川典子、文化財情報資料部広領域研究室長・小林公治が「第38回日本文化財科学会ポスター賞」を受賞しました。
- 保存科学研究センター分析科学研究室長・犬塚将英が、ひたちなか市の史跡保存対策委員として長きにわたる貢献により令和3年度ひたちなか市表彰を受けました。

リンク集

【東京文化財研究所 SNS】

- 「Facebook」
<https://www.facebook.com/NRICPT>
- 「Twitter」
https://twitter.com/tobunken_nich
- 「YouTube」
https://www.youtube.com/channel/UCCi_kTv2aTz25EuO-U9mNdA/videos



Facebook



Twitter



YouTube

【東文研総合検索サイト】

図書や画像などの所蔵資料のほか、文化財に関する情報等について29のデータベースを横断的に検索できます。

<https://www.tobunken.go.jp/archives/>



東文研総合
検索サイト

資料閲覧室利用案内

資料閲覧室は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、開室日・時間を以下に変更し、予約制にて運営しています。

開室：毎週月・金曜日10：00～16：00

休室：国民の祝日、夏期・年末年始

今後の状況により、開室日時を変更することがあります。

ご利用の際はウェブサイトで予約方法・最新情報をご確認ください。

<https://www.tobunken.go.jp/joho/japanese/library/library.html>

